

## 有能感の4類型と被援助時の感情、返礼行動の関連 ： 仮想型に注目して

著者	澄川 采加, 稲垣 勉, 島 義弘
雑誌名	鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要
巻	29
ページ	124-133
発行年	2020
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10232/00030943">http://hdl.handle.net/10232/00030943</a>

## 有能感の4類型と被援助時の感情，返礼行動の関連 — 仮定型に注目して —

澄川 采加 [鹿児島大学大学院教育学研究科]

稲垣 勉 [鹿児島大学教育学系 (教育心理学)]

島 義弘 [鹿児島大学教育学系 (教育心理学)]

Relationship between the four types of competence and emotions in receiving help, reciprocation of help:

Focusing on the assumption type

SUMIGAWA Ayaka, INAGAKI Tsutomu and SHIMA Yoshihiro

キーワード：仮想的有能感、自尊感情、返礼行動、有能感の4類型、被援助時の感情

### 問題・目的

「自己の直接的なポジティブ経験に関係なく，他者の能力を批判的に評価，軽視する傾向に付随して習慣的に生じる有能さの感覚（速水・木野・高木，2004，p.1）」と定義される仮想的有能感という概念がある。それは，人の無意識的な部分で生じ，意識的な部分に他者軽視という行動として現れると考えられている（速水，2006）。

仮想的有能感は，質問紙などの自己報告を用いて測定することが難しい。なぜならば，仮に本人がそう思っていたとしても，「本物の有能感とは言えない有能感を持っている」ということが公言される可能性が低いほか，「仮想的有能感とは，自分ではほとんど意識していないのに，他者の評価しがたい言動を観察したときに心の奥底から自然に吐露される（速水，2006，p.131）」瞬時の認知であるためである。そこで，「他者軽視傾向＝仮想的有能感（速水，2006，p.132）」と考え，仮想的有能感の無意識的な部分を意識的なレベルで測定するために，他者軽視傾向の程度を測る尺度が用いられる。これによって測定された他者軽視傾向が高い者の特徴として，他者との親密な関係を築きにくい（速水，2006），いじめの被害経験のみならず加害経験も多い（松本・山本・速水，2009）など，対人コミュニケーションに困難をきたすことが多いことが明らかにされている。

ただし，以上で述べてきた仮想的有能感は，本当に「仮想」的，すなわち根拠のない有能感と言えるかは自明ではない。自分に自信を持ち，それに基づいて他者を軽視している可能性も考えられる。そこで速水他（2004）は，この2つの有能感を区別するために，他者軽視傾向に自尊感情を組み合わせた4象限からなる「有能感の4類型」を提唱した（Figure1）。このうち自尊感情が低く他者軽視傾向が高い類型にある者は「仮定型」と呼ばれる。仮定型は自尊感情が低いことから，本来の仮想的有能感の定義である「自己の直接的なポジティブ経験に関係なく」という点に最も近似し

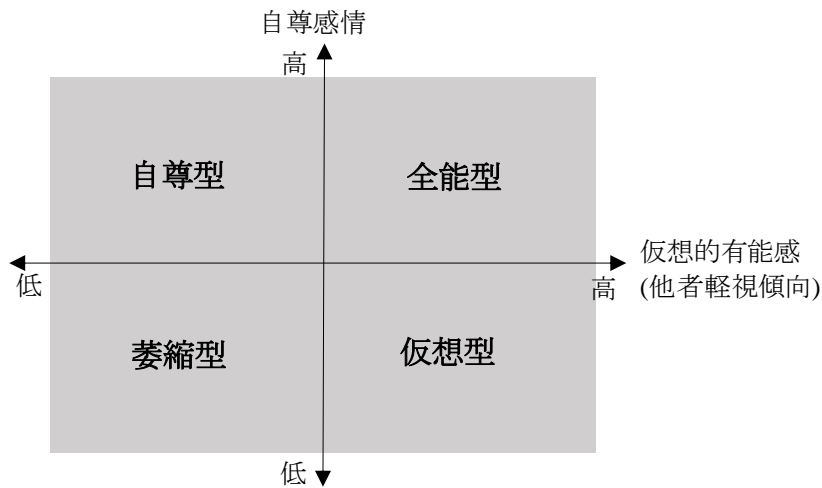


Figure1 有能感の4類型(速水・岡田・小塩(2012)を基に著者作成)

た類型になる(速水・岡田・小塩, 2012)。この仮想型の特徴を持つ者は、日常生活において敵意感情や抑鬱感情を生じやすく、これらの感情の揺れ動きが大きい(小平・小塩・速水, 2007)といった、他の類型と比してネガティブな特徴を持つという報告がある。しかし、有能感の4類型を扱う研究において仮想型独自の特徴を明らかにしたものは多くない。ほとんどは他者軽視傾向の高さによるもので、全能型と仮想型が同様の結果を示している(e.g., 速水・木野・高木, 2005; Hayamizu, Kino, & Takagi, 2007)。

そこで、本研究では試みに「返礼行動」を指標として用いて、仮想型の特徴を検討したい。なぜならば、仮想的有能感の高い人は共感性が低いことや(速水他, 2004)、相手の立場に立った援助を選択しにくい(小平・青木・松岡・速水, 2008)ことが指摘されており、これらの特徴は相手の立場に立ち相手のことをよく考えて行う必要のある返礼行動において、顕著に現れると考えられるためである。返礼行動とは、他者から何かしらの援助を受けた際に、援助者に対して行われるお返しのことであり、その量や種類は人によって異なる。返礼行動は対人関係の維持に関係しているとされるが(相川, 1988)、上述の小平他(2007)のように、仮想型の特徴を持つ者は敵意・抑鬱の感情を持ちやすいなど、対人関係においてネガティブな特徴を持つことが報告されている。このように考えると、仮想型の特徴を持つ者は、返礼行動においても何らかのネガティブな特徴を示す可能性がある。

上述のとおり、返礼行動は他者からの援助がきっかけとなって生起するものである。他者から援助を受けた際、仮想型の人はどうのような感情を抱くのだろうか。島(2012)によると、他者との親密さを求める一方で強い対人不信があり、それが親密さに対する不快感や親密な関係の回避につながる愛着スタイルである「恐れ型」と、有能感の4類型における「仮想型」は共通する部分がある。また、箕浦・成田(2009)は、仮想型および萎縮型は、被受容感と被拒絶感の両方が高いことを報告している。

以上のことから、仮想型の特徴を持つ者は、他者から援助を受けた際に、相手に受容されたと思

い喜ぶ反面、拒絶されることへの不安から、その好意を心から信じるのが難しく、心苦しきのような感情が生起すると考えられる。こうした心苦しきのような感情が生起するとすれば、受容された相手からの拒絶を恐れ、過剰な量の返礼を行うという特徴が観察されるかもしれない。さらに本研究では「どの程度の返礼を行うか（返礼の量）」のみならず、「どのような返礼を行うか（返礼の質）」についても、探索的に検討を行うこととする。

本研究の実施にあたってはシナリオ実験を用いるが、被援助場面の援助者の援助コストに注目した2種類のシナリオを使用し、それによる返礼行動の違いについても検討する。援助コストの高い被援助場面の方が、援助コストの低い被援助場面よりも返礼行動が促進されやすいと予測できる。中でも、仮想型においては援助コストの高低の異なる被援助場面で違いが見られると考えられる。仮想的有能感の高い人は個人的出来事に対して怒りを感じやすい（Hayamizu, Kino, Takagi, & Tan, 2004）ように、自分の身近な出来事に関してはより感情が生起しやすいと考えられる。本研究で用いる被援助場面は、援助コスト低場面の方が援助コスト高場面よりもより身近で起こる可能性が高いものであるため、仮想型においては援助コスト低場面で何らかの特徴が見られると考えられる。よって本研究では、援助コストの異なる2つのシナリオを使用し、親友から援助された際に生じる感情や後続の返礼行動について、特に仮想型に注目して検討する。

## 方法

### 調査対象者

18–41歳の大学生・大学院生176名（男性65名、女性109名、不明2名；平均年齢20.86歳、 $SD = 8.44$ ）を対象とした。

### 調査期間

本調査は2018年10月下旬–11月下旬にかけて行った。

### 質問紙

**フェイスシート** 年齢、性別の記入を求めた。記入をしたことをもって本研究の参加に同意したとみなすこと、記入は任意であることなどを質問紙の表紙に記載した。

**自尊感情** Rosenberg（1965）の自尊感情尺度の日本語版（山本・松井・山成，1982）の項目を用いた。項目は「少なくとも人並みには、価値のある人間である」や「自分に対して肯定的である」など10項目からなり、「いいえ」を1点、「はい」を4点とする4件法で評定を求めた。

**他者軽視傾向** 速水（2006）の他者軽視傾向尺度を用いた。項目は「自分の周りには気のきかない人が多い」や「世の中には常識のない人が多すぎる」など11項目からなり、「全く思わない」を1点、「よく思う」を5点とする5件法で評定を求めた。

**被援助シナリオ** 相川（1988）によると、「援助成果」が成功で「援助者との関係」が親友の場合に、被援助者の返礼行動が行われやすいとされている。そこで、本研究では相川（1988）が作成した被援助場面のシナリオを参考に、親友から援助を受け、それが成功したという場面設定で、「援助コストの大きさ」の高低が異なる2つのシナリオを使用した。その際、シナリオの文の表現につい

て、調査対象者である大学生が想像しやすいように、一部表現を変更した。また、シナリオを読む前に親友のイニシャルの回答を求め、「その親友を A さんとする」といった教示を行った上でシナリオを読んでもらった。質問紙は「援助コストの大きさ」について2種類用意し、無作為に配布した（使用したシナリオは付録に示した）。

**被援助時の援助者に対する感情** 一言・新谷・松見（2008）を参考に作成したものをを用いた。項目は「ありがたい」や「申し訳ない」など10項目からなり、「全くそう思わない」を1点、「非常にそう思う」を6点とする6件法で評定を求めた。

**返礼の量** 一言他（2008）の尺度を用いた。「あなたが A さんにお返しをしたら、適当な量はどれほどだと思いますか」という単項目からなり、「報いない（1点）、挨拶程度（2点）、受けたものの半分くらい（3点）、受けたものより少し少なめ（4点）、受けたものと同じくらい（5点）、受けたもの以上（6点）」の6件法で評定を求めた。

**返礼の種類** 具体的な返礼行動を測定するために、上述のシナリオのような状況において、親友の A さんに対して行う返礼行動として、具体的な物や言動を自由記述で回答するよう求めた。

#### 手続き

質問紙形式でシナリオ実験を行った。質問紙は上記の順番で回答を求めた。なお、他にも心理尺度を測定しているが、本研究の目的とは異なるため、報告は割愛する。

### 結果

「被援助時の援助者に対する感情」「返礼の量」「返礼の種類」に関して、親友のイニシャルを記入していなかった調査対象者（6名）は、被援助シナリオを十分に読み込めておらず、その状況を自身に起こったことのように思えていなかったとみなし、上記の3尺度を含む分析ではこの6名分のデータを除いた。

#### 被援助時の援助者に対する感情の因子構造

被援助時の援助者に対する感情尺度は多くの項目に天井効果や床効果（ $\pm 1SD$  基準）がみられたため、これらを除き、残った3項目に対し主成分分析を実施した。その結果、「申し訳ない」「恥ずかしい」「驚き」の3項目からなる1因子構造（寄与率 54.39%）が得られた。最初に設けていた項目の中でも、ネガティブではあるが攻撃的でない項目であることから、この因子を「静的ネガティブ感情」と命名して合算平均得点を求めた（ $\alpha = .57$ ）。なお、被援助時の援助者に対する感情尺度の全項目の内容および記述統計量は付録に示した。

#### 各尺度間の相関と記述統計量

自尊感情尺度、他者軽視傾向尺度、静的ネガティブ感情、返礼の量のそれぞれの相関について算出し、それぞれの記述統計量とともに以下の Table1 にまとめた。また、援助コストの高低それぞれにおける各尺度間の相関およびその記述統計量について Table2 にまとめた。

Table1 各尺度間の相関および記述統計量

	1	2	3	4	<i>M</i>	<i>SD</i>
1. 自尊感情	—	-.12	-.21 **	-.17 *	2.58	0.48
2. 他者軽視傾向		—	.10	-.14 †	2.72	0.61
3. 静的ネガティブ感情			—	.12	3.24	1.01
4. 返礼の量				—	4.65	1.23

\*\* $p < .01$ , \* $p < .05$ , † $p < .10$

Table2 援助コスト高低それぞれの各尺度間の相関および記述統計量

	1	2	3	4	<i>M</i>	<i>SD</i>
1. 自尊感情	—	-.12	-.21 †	-.13	2.56	0.53
2. 他者軽視傾向	-.13	—	.14	-.15	2.69	0.61
3. 静的ネガティブ感情	-.20 †	.05	—	.09 †	3.27	1.10
4. 返礼の量	-.20 †	-.12	.14	—	4.93	1.18
<i>M</i>	2.61	2.75	3.20	4.38	—	—
<i>SD</i>	0.44	0.61	0.91	1.22	—	—

† $p < .10$

※右上は援助コスト高場面，左下は援助コスト低場面

### 有能感の4類型と各尺度の関係

先行研究と同様に自尊感情と他者軽視傾向との間に有意な相関がみられなかった (Table1) ため，島 (2012) と同様に自尊感情尺度得点 ( $\alpha = .81$ ) と他者軽視傾向尺度得点 ( $\alpha = .81$ ) の中央値 (順に 2.55, 2.73) を基準に，参加者を有能感の4類型 (全能型，自尊型，仮想型，萎縮型) に割り当てた (順に  $n = 40, 42, 39, 39$ )。

本研究で使用した2種類の被援助シナリオは無作為に配布したが，そのシナリオ間で4類型の人数に差がないか確かめるために，有能感の4類型と被援助シナリオで $\chi^2$ 検定を行った (どちらのシナリオもそれぞれ  $n = 85$ )。その結果，有意な連関は認められなかった ( $\chi^2(3) = 2.13, p = .55$ )。

**静的ネガティブ感情** 被援助時の援助者に対する感情を従属変数，有能感の4類型と援助コストの高低を独立変数とした2要因参加者間分散分析を行った。その結果，有能感の4類型の主効果が見られた ( $F(3, 152) = 3.04, p < .05, \eta_p^2 = .06$ )。TukeyのHSD法で多重比較を行ったところ，仮想型において，静的ネガティブ感情が他の類型より有意に高い傾向が見られた (Figure2)。

**返礼の量** 返礼の量を従属変数，有能感の4類型と援助コストの高低を独立変数として2要因参加者間分散分析を行った。その結果，援助コストの主効果のみ有意であり ( $F(1, 151) = 8.07, p < .05, \eta_p^2 = .05$ )，援助コストの高い方が返礼の量が多かった。

**返礼の種類** 返礼の種類について，KJ法を援用して，自由記述で得た回答を分類したところ，「感謝の言葉」「安価な食べ物」「高価な食べ物」「安価な物」「高価な物」「食事を奢る」「その後の行動」「その他」の8カテゴリーが抽出された。続いて，第1著者と第2著者が独自に回答を8カテゴリ

一に分類した。互いに分類の違いのある箇所については議論した上で、すべてのデータを分類した。「その他」を除く7つのカテゴリー分類における測定者間の一致係数 ( $\kappa$  係数) は順に.89, .94, .81, .61, .90, .82, .74 だった。各カテゴリーにおけるコストごとの度数を Table3 にまとめた。

7つのカテゴリーについて有能感の4類型とコストの高低で  $\chi^2$  検定を行った。ただし、期待度数が5未満のセルが20%以上ある場合は(「感謝の言葉」以外の6カテゴリーが該当した)、フィッシャーの直接確率法を用いた。その結果、すべてのカテゴリーにおいて有意な連関は認められなかった(「感謝の言葉」では  $\chi^2(3)=1.14, p=.77$ , それ以外のカテゴリーではフィッシャーの直接確率法において  $ps \geq .17$ )。

### 考察

本研究は、有能感の4類型と被援助時に生起する感情、返礼行動との関連について、2種類の被援助場面のシナリオを用いて検討した。被援助時の感情に対する分散分析の結果から、仮想型は被援助時に、他の類型よりも静的ネガティブ感情を喚起しやすい傾向にあることが明らかになった。特に、静的ネガティブ感情は「申し訳ない」「恥ずかしい」「驚き」といった、心苦しさに似た感情で構成されており、仮想型がこうした感情を喚起しやすかった点は、当初の予想と一致した結果である。

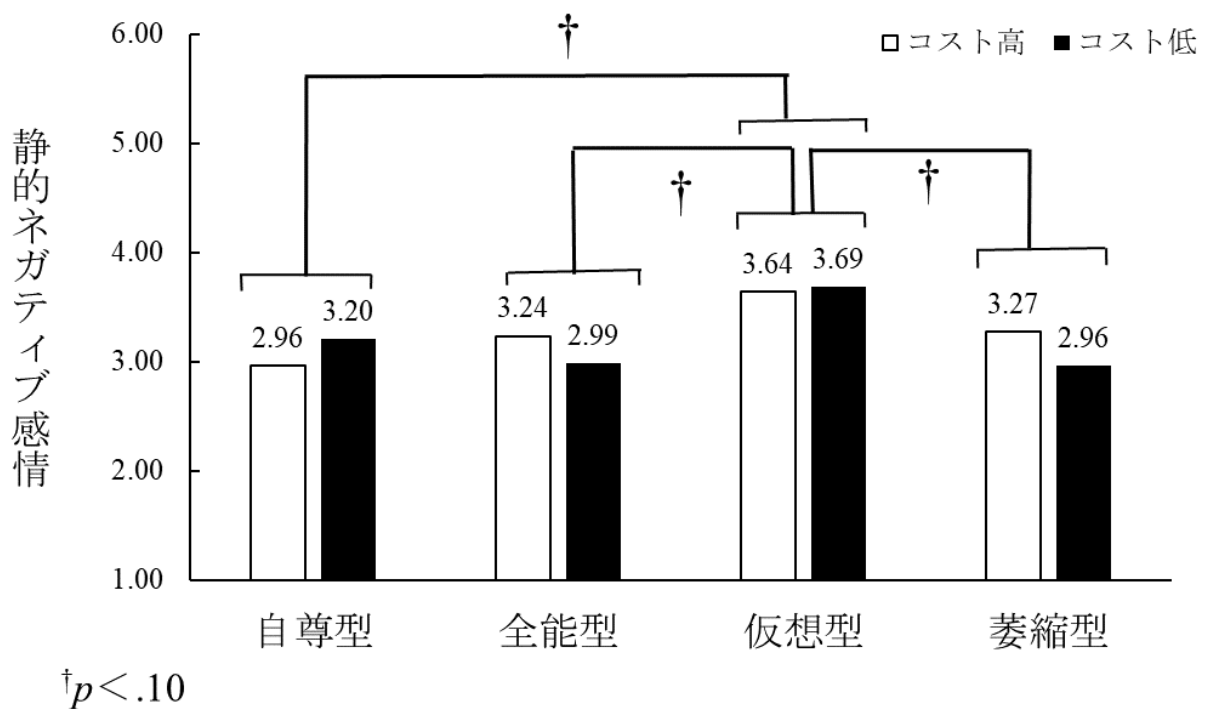


Figure2 静的ネガティブ感情の分散分析の結果

Table3 各カテゴリーにおけるコストと有能感の4類型のクロス集計表

	コスト	自尊型	全能型	仮想型	萎縮型
感謝の言葉	高	15	8	12	14
	低	12	12	13	13
安価な食べ物	高	2	3	1	0
	低	13	11	15	12
高価な食べ物	高	7	9	6	8
	低	0	4	2	0
安価な物	高	0	1	1	0
	低	1	1	4	1
高価な物	高	8	7	6	7
	低	2	1	3	1
食事を奢る	高	4	7	4	4
	低	0	3	1	1
その後の行動	高	2	2	1	1
	低	3	1	4	1
その他	高	0	1	0	0
	低	0	1	0	1

こうした結果の解釈として、仮想型が有している「満たされない感覚（小平他, 2007）」が仮想型のネガティブ感情を喚起させていると考えることができる。藤・湯川（2005）はこの感覚が敵意のようなネガティブ感情の認知に関連していることを示唆しており、本研究の結果も同様だと考えられる。

また、この心苦しさに似た感情は返礼行動を行うにあたって生起する「心理的負債感」という感情に類似している。心理的負債感は Greenberg（1980）が「援助者に返報する義務がある状態（相川・吉森, 1995, p.63）」と定義した概念で、相川・吉森（1995）は、心理的負債感はそれを低減するよう人を動機づける性質を持っていると述べている。このことから、一般に、心理的負債感が大きいほど、これを低減しようとする動機も強まり、低減のための認知や行動の変化も大きくなると仮定される（相川・吉森, 1995）ため、その大きくなった心理的負債感を低減しようとする返礼行動に対する動機が促進され、実際に返礼行動の生起につながると考えられる。このように考えると、本研究において心理的負債感と類似した静的ネガティブ感情を最も生起していた仮想型は、最も返礼行動を行うと予想できる。しかし、返礼の量の違いは援助コストの影響が大きいことが示唆され、返礼の量における仮想型独自の特徴は見られなかった。

本研究では、援助コストについて高低の2種類のシナリオを使用し、援助コストの違いについて検討を行った。その結果、返礼の量は援助コスト高条件の方が援助コスト低条件よりも多いことが明らかになった。このことは被援助シナリオで描写された援助者の援助コストの操作が妥当であったことを示唆している。しかし、仮想型において援助コストと返礼の量に他の類型とは異なる特徴が見られると予想していたが、援助コストの高低にかかわらず、そのような結果は得られなかった。このことは、返礼の量はパーソナリティよりも本研究で用いたシナリオの影響を大きく受ける可能



性を示している。

本研究の課題として、感謝感情を含むポジティブ感情について、天井効果のため分析から除外せざるを得なかった点が挙げられる。その結果、静的ネガティブ感情のみを扱うことになり、多面的な感情の検討ができなかった。また、返礼行動が促進されやすいシナリオのみを選択したことにより、感謝感情が喚起されやすくなり、援助者コストの高低による差はあるものの、返礼行動が生じやすいといった結果となり、パーソナリティの個人差の影響が観察されにくかった可能性がある。

こうした点を踏まえ、今後は感情をより多面的に捉えることを期して感情語を増やしたり、被援助シナリオについて、「援助成果」を成功場面だけでなく失敗場面（e.g., 一緒に探し物をしてくれたが、見つからなかった、など）も加えた4種類を用いたりするなどの工夫を行い、あらためて検討を行う必要がある。

冒頭でも触れたが、仮想的有能感は他者軽視を通して、無意識のうちに真実でない仮想的な有能感を得ようという潜在的なプロセスを含むものである（速水, 2006; 小塩・西野・速水, 2009）。したがって、それを質問紙などの自己報告で測定するという方法を疑問視する指摘もある（速水, 2012）。また、他者軽視傾向のように公言しにくいようなものには、社会的な望ましきによる回答の歪みが生じる可能性がある。実際に、藤井・上淵・利根川・上淵・山田（2010）は他者軽視傾向と社会的望ましき反応尺度の「印象操作」に負の相関があることを明らかにしている。これらの指摘を踏まえて、仮想的有能感の測定には Implicit Association Test (Greenwald, McGhee, & Schwartz, 1998) など質問紙によらない方法も提案されている（藤井・上淵, 2011）。今後、こうした測度の使用も一考に値すると思われる。

#### 引用文献

- 相川 充 (1988). 心理的負債に対する被援助利益の重みと援助コストの重みの比較 心理学研究, 58, 366–372.
- 相川 充・吉森 護 (1995). 心理的負債感尺度の作成の試み 社会心理学研究, 11, 63–72.
- 藤 桂・湯川 進太郎 (2005). 満たされない自己が敵意的認知と怒り感情に及ぼす影響 カウンセリング研究, 38, 22–32.
- 藤井 勉・上淵 寿 (2011). 他者軽視傾向を測定する IAT の作成 東京学芸大学紀要 (総合教育科学系 I), 62, 287–291.
- 藤井 勉・上淵 寿・利根川 明子・上淵 真理江・山田 琴乃 (2010). 他者軽視と社会的望ましきの関連 日本パーソナリティ心理学会第19回発表論文集, 67.
- Greenberg, M. S. (1980). A theory of indebtedness. In K. Gergen, M. S. Greenberg, & R. H. Willis (Eds.). *Social exchange: Advances in theory and research* (pp. 3–26). New York: Plenum.
- Greenwald, A. G., McGhee, D. E., & Schwartz, J. L. K. (1998). Measuring individual differences in implicit cognition: The Implicit Association Test. *Journal of Personality and Social Psychology*, 74, 1464–1480.

- 速水 敏彦 (2006). 他人を見下す若者たち 講談社
- 速水 敏彦・木野 和代・高木 邦子 (2004). 仮想的有能感の構成概念妥当性の検討 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 (心理発達科学), 51, 1-8.
- 速水 敏彦・木野 和代・高木 邦子 (2005). 他者軽視に基づく仮想的有能感——自尊感情との比較から—— 感情心理学研究, 12, 43-55.
- Hayamizu, T., Kino, K., & Takagi, K. (2007). Effects of age and competence type on the emotions: Focusing on sadness and anger. *Japanese Psychological Research*, 49, 211-221.
- Hayamizu, T., Kino, K., Takagi, K., & Tan, E. H. (2004). Assumed-competence based on undervaluing others as determinant of emotions: Focusing on anger and sadness. *Asia Pacific Education Review*, 5, 127-135.
- 速水 敏彦・岡田 涼・小塩 真司 (2012). 仮想的有能感とは何か 速水 敏彦(編著) 仮想的有能感の心理学——他人を見下す若者を検証する——(pp.1-34) 北大路書房
- 一言 英文・新谷 優・松見 淳子 (2008). 自己の利益と他者のコスト——心理的負債の日米間比較研究—— 感情心理学研究, 16, 3-24.
- 小平 英志・青木 直子・松岡 弥玲・速水 敏彦 (2008). 高校生における仮想的有能感と学業に関するコミュニケーション 心理学研究, 79, 257-262.
- 小平 英志・小塩 真司・速水 敏彦 (2007). 仮想的有能感と日常の対人関係によって生起する感情経験——抑鬱感情と敵意感情のレベルと変動性に注目して—— パーソナリティ研究, 15, 217-227.
- 松本 麻友子・山本 将士・速水 敏彦 (2009). 高校生における仮想的有能感といじめの関連 教育心理学研究, 57, 432-441.
- 箕浦 有希久・成田 健一 (2009). 所属欲求は自尊心と他者軽視傾向の関係を媒介するか? 日本心理学会第73回大会発表論文集, 51.
- 小塩 真司・西野 拓朗・速水 敏彦 (2009). 潜在的・顕在的自尊感情と仮想的有能感の関連 パーソナリティ研究, 17, 250-260.
- Rosenberg, M. (1965). *Society and the adolescent self-image*. New Jersey: Princeton University Press.
- 島 義弘 (2012). アタッチメントの内的作業モデルと仮想的有能感の関連 パーソナリティ研究, 21, 176-182.
- 山本 眞理子・松井 豊・山城 由紀子 (1982). 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, 30, 64-68.

## 付録

### 本研究で用いた被援助シナリオ

**援助コスト高条件** あなたは通学中に横断歩道を渡っている時に、車に接触して転倒しました。ズボンから血がにじみ、足首が痛くて思うように動かすことが出来ません。そこに親友のAさんが現れ、Aさんはすぐ近くの病院に連絡しました。看護師が2人来てあなたをタンカで病院に運び込

みました。あなたは医師から骨折しているかもしれないが、すぐに病院に来たので適切な手当ができると言われました。

**援助コスト低条件** あなたは、講義終了後、アルバイトに行くために自転車に乗ろうとしたが、自転車の鍵が見当たりません。あなたは1人で講義室や周辺の廊下を探しています。そこに現れた親友のAさんが一緒に自転車の鍵を探してくれて、1, 2分もたたないうちに講義室で鍵を見つけてくれました。あなたは鍵が見つかったので、アルバイトにも間に合いました。

#### 被援助時の援助者に対する感情の各項目の記述統計量

	<i>M</i>	<i>SD</i>
ありがたい	5.84	0.38
申し訳ない	4.57	1.23
恥ずかしい	2.41	1.29
悲しい	1.64	0.93
悔しい	1.48	0.79
戸惑い	1.76	1.16
怒り	1.25	0.60
驚き	2.75	1.57
嬉しい	5.52	0.89
安心した	5.61	0.73

#### 付記

本論文は第1著者が第2著者の指導の下、鹿児島大学教育学部に平成30年度卒業論文として執筆・提出したものをもとに、第2著者と第3著者の指導を受けて再構成したものです。調査にご協力いただいた大学生・大学院生の皆様に心からお礼申し上げます。

また、本論文の結果の一部は、日本感情心理学会第27回大会における発表や、教育テスト研究センター年報第4号の「速報」にて公開されており、本論文はそれをさらに深く解析し、新たにまとめたものです。